

色あせたポストモダン思想

橋爪大三郎（はしづめ・だいさぶろう） 一九四八年鎌倉市生まれ。東京工業大学助教授。七七年東京大学大学院博士課程修了。  
〔言語〕 派社会学の樹立をめざす一方、日本の知的言論をめぐって積極的に発言している。

——八〇年代はじめごろから日本では「ポストモダン」という言葉が流行し、気鋭の若手研究者が「ポストモダンの思想家」と呼ばれたりした。そもそもポストモダンの思想とはなんなのでしょう。橋爪 一般的には、建築の分野から始まったといわれています。ある時期からトンガリ屋根とかアーチ型とか、大理石をたくさん使った奇妙なかつこうの建物がたくさん出てきて、機能性、合理性を一貫して追求していた近代建築とは随分違った印象を与えた。そこには一言でいえば、そんなにまじめに一途に何かを求めなくても、面白ければいいじゃないか、というような発想があった。同じころ現代思想にも似たような考え方が始まっていて、マルクス主義とか実存主義があるべき社会のモデ

ルとか人間の存在理由とかをまじめ一本やりに追究していたのに対し、それはまずいんじゃないか、豊かな現在の社会に生きる我々の感覚にびったりした発想で、自由にものを考えたらどうだろう、と言い出した。それがポストモダンの思想だったと思うんです。

西欧が到達したポストモダン 基本的にはフランスではやった思想を土台にしているとされます日本のそれとはほとんど無関係が。

橋爪 フランスの現代思想、つまりポスト構造主義をわかりやすくしゃべったのが日本のポストモダンと考えていい。マルクス主義にこだわらず、今の資本主義でいいじゃないかという考えを前提にしていた。かつての言論のリーダーは、マルクス主義に未練があった戦後の進歩的知識人だったが、それとは全く違った若い研究者や評論家が担い手になりました。そして豊かな消費社会で育ってきた若い人の感覚にフィットした……。

「明るい豊かな未来」を築くためにひたすら『真理探求の道』に励んでみたり、企業社会のモデルに自己を同一化させて『奮励努力』してみたり、あるいはまた『革命の大義』とやらに目覚めて『盲目なる大衆』を領導せんとしてみたりするよりは、シラケルことによってそうした既成の文脈一切から身を引き離し、一度すべてを相対化してみる方がずっといい。

これは一九八三年に出版された浅田彰の『構造と力』（勁草書房）の二節。浅田をはじめ中沢新一、栗本慎一郎などがポストモダンの旗手とされ、難しめの翻訳書を手にとるおしゃれな若者が街にあふれた。「欲望」「戯れ」「差異」の強調が日本的ポストモダンの特徴でもあった。——外国のポストモダンと日本のポストモダンとの間に違いはあるのですか。

橋爪 ヨーロッパ人には自分たちが一番進んでいて、立派で、世界をリードしてきたという自信があった。ところが二十世紀になって自己懷疑みたいなものが出てきた。要するにフランスのポストモダンというのは非常にまともな形で表れた現代思想であり、ヨーロッパの知識人の一番新しい努力なんだと思う。

——日本の場合、翻訳の努力くらいはあったと思いますが、自己懷疑するような必然性はあったかどうか……。

橋爪 これはよく言われるのですが、日本というのは「プレモダン」と「モダン」と「ポストモダン」のサンドイッチなんです。あるところではモダニズムに全く感染していないようなことが平然と通用している。例えば温泉につかって演歌を歌う人たちがいっぱいいるとか、あるいは、自民党の選挙のやり方とかには腹芸や、長いものには巻かれるといった、日本以外では通用しないような慣習がたくさんあるでしょう。それとは別に、世界中どこへ出しても恥ずかしくない自動車やコンピュータもつくれる。スーツを着てるし、議会も民主主義も何でもあるじゃないか。これは立派なモダニズムですね。なおかつ、そのモダニズムが行き詰まったという前提で、これをどう乗り越えるかという知的ファッションみたいなポストモダンをやっている。

——西欧がポストモダンと言いつつまでの過程と、日本がポストモダンを受容していくプロセスとは、質的に全く違う。

橋爪 ほとんど関係ないんですね。例えば今でこそ世界でトップクラスの日本の自動車だって、最初はノックダウン生産だった。つまり部品は全部外国から輸入して組み立てて、完成品にして、日本

国内で走らせて喜んでいました。次にやっとなパテント生産を始めた。外国から特許を買ってきて、パーツだけ日本で調達してこしらえた。でも肝心のノウハウは依然外国にある。その次にいよいよ日本独自のものをつくれるようになった。

しかし、工業はそれでよかったが、知の生産は大変だ。自動車は約一世紀前に発明されたのですが、知識の伝統は古代ギリシャからあるわけですから。今のポストモダンは、早い話が、部品を買ってきて組み立てているノックダウンみたいなものじゃないかと思うんです。

——目いっぱい背のびしないと追いつけない。

橋爪 筒井康隆の『文学部唯野教授』の世界ですよ。あの小説で唯野教授は文芸批評とか現代思想に非常に詳しいんですけど、彼が自分で考えたというのにはあまりなくて、みんなうわさ話なんです。プレモダンとモダンとポストモダンがある日本にいるからには、そのどれか一つに飛びつくというのではなく、その間を往復運動していなければならぬんじゃないかと思うんです。

日本のポストモダンの思想は、現在の豊かな消費社会の現実を解読するには、きわめて明快でしかも新鮮な図式を与えてくれた。例えば、新しいファッションを求め、次々と「違い」を見つけて出す行動様式を「自己差異化」という言葉で説明したりした。しかし、戦争が始まり、豊かな社会の足元が揺れ始めると、こうした現実の面白い「タネ明かし」をする思想への満ち足りない気持ちが始まる。



日常のドロくさい問題は苦手  
モダニストの方がまだ役立つ

——ポストモダンには、二者択一を迫られる単純な問題についてはあまり話してくれませんね。

橋爪 ドロくさい問題というのが苦手なんです。ポストモダンの人の書くものはシャープでいい。ところがふと日常に返ると、例えば選挙になれば自民党と社会党と、なんとか覚しかな。ポストモダン党なんかどこにもないんです。自衛隊の派遣とか九十億ドルの支援問題も、やるべきかやらざるべきか、どっちか選ばなければならぬときだってある。どうしたらいいんだらうと考えると、

その点、八〇年代にはやった江戸ブームというのは象徴的なんです。江戸時代の消費は町人が担い、武士は消費なんかしてはいけなかった。彼らは武力、軍事とか別の担うべきものがあった。そういう棲み分けをしたのですが、戦後六〇年代以降の日本は、ある意味で全部江戸の町人社会になってしまったともいえる。つまり政治、軍事、外交は考えず、代わって米国の考えられていた。日本は土農工商の町人の部分をやっていたらよかった。これは、本当の「知」にとっては巨大な欠落だったんです。

——普通の人の日常生活の大事な部分をカバーするようなものがない。

橋爪 まだモダニストの方が、ドロくさい問題では役に立つことがある。いじめ問題が起こったときには、いじめちゃいけないとか、日教組の人は言ってくれるわけです。役に立つかどうかは別にして。ところがポストモダンの人の言い方はややくせして、ふつうのお母さんにはちょっとわからない。だからモダニストだってまだ道具をそろえて登場してくる場面があるだろう。自民党の金丸さんなん

か、何か考えているような感じするでしょう。学問や思想は、そういう人たちの知恵や知識と、本当は渡り合っていないといけない。

——アカデミズムの人もなかなか大変なことになってきた。

橋爪 プレモダンの人も、モダニストとも、ポストモダンの人もつき合う。それから日本がこれだけ近代化しているように、なぜ欧米と決定的に違う部分をいつまでも引きずっているのか——香典に何万円か包んでしまうというような生活パターンの起源を、自分の発想で突きとめていく。それはマルクス主義が教える歴史ではわからない。そのために方法が必要なら方法を考える。外国にあるならば、それを使い、見つからなければ自分でつくればいいのです。(聞き手は宮川匡司)

最新刊の『現代思想はいま何を考えればよいのか』(勁草書房)は、ポスト冷戦時代の時代認識を背景に、日本の言論が世界に通用しない原因を明快に説きあかす。倫理、法律、国家制度、教育、経済、伝統といった普通の市民が生活していく上で、解決を要する問題から目をそむけてきたこれまでの現代思想を批判し、外国へ追いつく「キヤッチ・アップ」の思想からの転換を主張する。『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)はマルクス主義と日本国憲法の検討を通じて、アクチュアルな社会科学の必要性を説く。このほか『はじめての構造主義』(講談社現代新書)や『仏教の言説戦略』(勁草書房)などがある。

「冷戦の終結、戦争の危険が去った、やれやれと喜ぶのはまだ早い。半世紀にわたって世界を支配した枠組みがいよいよ解体した後、どういった世界が訪れるのか、きちんと考えるべきだ。」

冷戦の終結、戦争の危険が去った、やれやれと喜ぶのはまだ早い。半世紀にわたって世界を支配した枠組みがいよいよ解体した後、どういった世界が訪れるのか、きちんと考えるべきだ。

冷戦の終結、戦争の危険が去った、やれやれと喜ぶのはまだ早い。半世紀にわたって世界を支配した枠組みがいよいよ解体した後、どういった世界が訪れるのか、きちんと考えるべきだ。

冷戦の終結、戦争の危険が去った、やれやれと喜ぶのはまだ早い。半世紀にわたって世界を支配した枠組みがいよいよ解体した後、どういった世界が訪れるのか、きちんと考えるべきだ。

冷戦の終結、戦争の危険が去った、やれやれと喜ぶのはまだ早い。半世紀にわたって世界を支配した枠組みがいよいよ解体した後、どういった世界が訪れるのか、きちんと考えるべきだ。

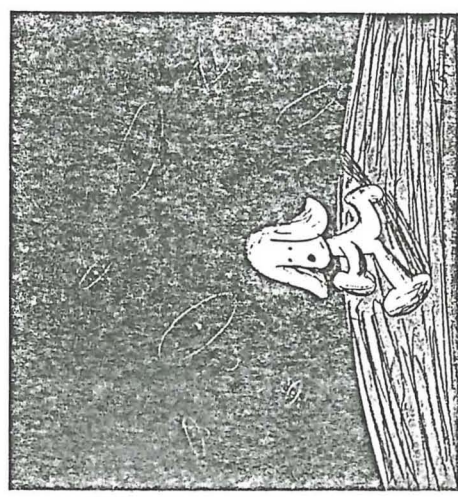


Illustration: Takeshi Kojima

冷戦後、米ロ同盟が軸になる。  
橋爪大三郎=文  
text by Daisaburo Hashizume

ESQUELLE  
ESQUELLE



# Tokyo Creative'92 Data Book

東京クリエイティブ'92 データ・ブック

## 資本主義システムの展望

21世紀プロダクツへのヴィジョン

東京工業大学工学部助教授 橋爪大三郎

1992-11-③

### 20世紀社会はどのような時代だったか

19世紀の資本主義、いわゆる古典資本主義は、非常に隆々と成長してきたと考えられているようですが、実は当時のイギリスの年成長率は2%~3%という安定成長だった。構造変化もゆるやかで、景気の波もあまり目立たなかった。そもそも経済成長という考えすらあまりなかったのです。その当時は社会はそれなりにどんどん変化していたので、今考えられるような7%~10%の成長なんてありえなかった。

経済成長の加速が始まったのは、19世紀末から20世紀のはじめにかけてです。石炭から石油に主要なエネルギー源がシフトしたり、科学技術が産業と一体になって急速に進歩をとげたり、という変化が起こった。イギリス、フランス、ドイツなどの先進国では、理論物理学や化学の成果が、例えば、電化、蓄電池、内燃機関、自動車、飛行機の実用化につながり、新規設備投資による産業の急成長というパターンが現われてくる。そして、それに平行して景気の波が顕著になった。資本主義国の対立も激しくなり、20世紀が始まったわけです。

このように20世紀初頭は、社会が混沌としたまま暴走しはじめたわけですが、ちょうどロデオの荒馬のように、それをコントロールする手段がなかった。恐慌や戦争に振り回され、誰も社会全体のことがよく分らないという状態です。

そういった状況から、社会全体についてあるパースペクティブを持ち、それを秩序づけなければならぬという強い志向が生まれてくる。この志向はいくつか挙げられますが、まず(1)ファシズムが生まれる。国家権力を使い社会をコントロールしていこうとするものです。もうひとつは(2)共産主義という形で——これは国家社会主義といえませんが——マルクス・レーニン主義、スターリン主義という形の国家体制を作り上げ、労働者たちの新秩序をつくらうと

する。資本主義国においてもそれに対応する動きが現われてきた。それが、(3)ニューディール政策とか、ケインジアンの方針ですね。国家が需要管理とかたちで積極的に社会に関わってゆき、福祉政策、財政政策などを行なっていくというもの。

この三つのプランが鼎立したのが20世紀です。そして互いに激突していったわけです。まずファシズムが崩壊する。これは三つのプランのうち最も拡張的、侵略的だったからです。つぎに残りの二つが争う形で、冷戦時代が始まりました。そしてとうとう、共産主義体制が崩壊しました。こうしたプロセスを経て、残ったのが資本主義ということになるわけです。

### システムという考え方

ところで、三つのプランに共通しているのは「システム」という考え方です。混乱や無秩序、アナキーに対し、秩序を対置しようとした。ただしここでいう秩序とは、伝統的なものではなく、革新的なもの。社会をどんどん新しく作りかえながら、なおそこにそなわる秩序です。こういったものを「システム」と呼んだわけです。

システムというのは簡単にいうと、“多くの変数が集まったもの”という意味です。これは因果論の一種なのですが、単純な因果論ではなく、たくさんの変数の相互関係のかたちをとる。例えば、人口、経済成長率、利率、農業の生産高、失業率、犯罪率、死亡率…… なんでもいいのですが、じつに様々な数値が考えられる。これらの数値はバラバラに存在するのではなく、それぞれが社会というまとまりのある断面を写し取っているわけです。それをトータルに考察し、その関係を考えていく。そして、それらは全体としてコントロール可能であると考えらるんですね。ケインズ政策はまさにそうです。GNPという集計量を考え、GNPの上下を景気、不景気のパラメーターと考える。そして、それに基づいて問題解決を図る、という

# Tokyo Creative'92 Data Book

東京クリエイティブ'92 データ・ブック

ものです。これはまさにシステムの考え方です。以後、世界は、このシステムという枠組みから一歩も外に出ていない。そして現在も、この考え方で進んでいるわけです。システムは、変数の関係に注目した言い方ですから、変数の関係に力点を置く場合には構造と言っても同じことだけれど、構造は第一次大戦後からあまり変化していない。ただし、このシステムをコントロールする手段のほうは、コンピュータの発明により非常な速度で発達してきました。現在は、湾岸戦争などを見てもわかるように、実際にものを動かし、コントロールする場面では、アメリカも日本もすでに相当な技術を持っている。先進国はすべて同じ構造に立脚しているわけですから、他の国々にしても同様な技術を持っているわけです。しかもそれは年々強化されている。

こういったシステムにとって都合な要素はなにかというと、それは、予期せざる突発的な擾乱現象です。これは危機管理の問題になるのですが、十分危機に対応しようとすると能率が下がります。例えば1000年に一度しか降らない大雪に対応するために、いちいち融雪設備に多額の投資はできない。しかし、システムである以上、ある程度の危機管理はできなければならない。原発や飛行機のように、システムが崩壊したときに重大な損害が生じるものは、フェイルセーフの思想でもって、万一にそなえて、三重、四重のコントロール手段をそなえています。

### システムと、構造の調整

なぜ社会をシステムとしてコントロールすることが可能なのか。それは変数の因果関係を辿ることができるからですが、それで予測が可能になることに人々が関心を払うようになったことが大きい。システムをコントロールすることが可能になったとしても、まだいくつか問題が起こる。ひとつは、システム間の調整(各国調整)という問題です。システム相互のバランスが崩れると、原油価格や為替などが予想外の動きをしてしまう。それがひいては構造的な部分、例えばドルの固定為替制などの破綻につながってしまうわけです。理想としては、システムという考え方を採用する以上、構造が不断に変化していることが望ましい。しかし逆説的なことに、構造は定義上、変化しに

くいものことなわけですから、つまり、構造というのは甲殻類の殻みたいなもので、中身が動けるように枠組みをかためているのだけれども、時として中身と矛盾してくるから、そういうときにはいったん殻を脱ぎ捨てて、新しい殻をつくらなければならない。これが構造調整で、日米構造協議やウルグアイ・ラウンドなどはそういった構造調整の一環です。ですから、システムの主要な問題は、構造調整である。構造としては多国間調整と、一国の中での調整が考えられます。日本の中でいえば、古い構造、例えば土地制度が変わらなかったために、地価という変数だけが異常に上昇してしまった。それがシステムに与える歪みを、政治家なり学者なりジャーナリズムなりが考えていかなければならないのです。

構造調整とは、外科手術のように痛みや出血をとるもなうから、気分としては暗くなるのですが、20世紀経済は傾向的に拡大を続けているわけです。拡大=先が明るい、という意味だとすれば、その明るさを保障するための構造調整が進みつつある現在だって十分明るいというのが私の考え方です。

### 科学技術と経済システムの拡大

経済システムの持続的な拡大を何が支えているのか。これは言ってしまうと、「今までと違うことを人間がやりたいと思う」からなのです。

今までと同じことを千年一日のごとくやっていたのでは伝統社会になり、何も変化しない。ですから近代社会、特に20世紀の社会は、「今までと違うことを自分達がやりはじめ」てよいということが社会に組み込まれているわけです。その新しさのよってきたる源を突き詰めて言いますと、やはりアイデアということになる。そしてこのアイデアの核になる部分は、新しい科学技術、すなわち自然科学上の新発見なのです。

自然科学上の発見が実用化の段階に入ると、それまでの方法に比べてコストがかからなくなり、産業の潜在力がぐんと上向く。価格の低下に見合っ

て需要も増え、GNPが上昇する。簡単に言って、経済を押し上げるように働くわけです。普通の製品だったら平均利率しか儲からない。自由競争があるとして、そのときの長期金利が5%か3%としたら、利益はそれをすこし出るくらいしか得られない。銀行の借入金があれば、利息を払っ



たらほとんど残らない。そういう企業ばかりのところへ、新技術が登場すると、大きなビジネスチャンスが生まれる。

新しいアイデアは、個々の企業に構造変動を促します。あとはそれ(新技術)のフォローであって、システムで言えば、変数が徐々に成長していくプロセスになる。経営者はそのバランスをとるわけです。構造変動はコストがかかりますから、そればかり追い求めていくと経営のバランスシートが崩れてしまう。かと言って、経常的なことばかりやっているガリバー型企業にはなるかもしれないけれど、一夜明けると製品が時代遅れでさっぱり売れなくなってしまう可能性が高い。現在、バブルの逆風の影響があるとは言え、それでも傾向として、企業が研究開発部門などすぐにはリターンが得られない部門に出資を確実に増やしているのは健全なことです。

#### 科学技術が主導する未来

科学技術のもたらす利益はどこから得られるのか。なぜ研究開発投資を行なうと利潤が得られるのか。これは簡単に言えば、未来から得られるのです。利潤の原因にはいろいろな学説がありますが、銀行から長期金利で借入れをしている場合は、経営者自身の労働に対する対価は別として、経営者(企業)は儲らないというのはマルクスが証明した定理です。均衡状態において、利潤はゼロなのです。そのほかに、リカドの定理、差額地代説もあります。労働価値説の立場から地代の成立を説明するためにリカドが考えたアイデアですが、これを技術革新に応用すると、現在の技術である製品をつくっても、均衡に達しているから利潤はあがらない。それに対してある新機軸を使って同じ製品をつくった場合、原材料から製品への変換が効率的になるので、その差額分の利潤があがる。自分だけが特別な生産関数を持っていることになるわけですね。企業は先行者の利得を得たいという動機から研究開発投資を行なうのです。あまりにも長期にわたる研究や、あまりにも大規模な基礎研究は公共的な側面が強くなりますから、公共団体や国がやるわけです。

研究開発投資は問題を孕んでいます。研究開発投資額に対してそのリターンの額が不確定なのです。つまり、巨額の投資が丸損になることもあるので

す。ですから、普通の設備投資と違って、システムの考えに馴染みにくい。どちらかと言えば構造部分に関わる問題なのです。それで企業は、研究開発投資をどの水準にしたらよいかわからないので、同業他社を見て横並びの額に決めたりする。非常に日本的な解決策ですね。

間違えやすいけれども、よく行なわれるモデルチェンジなどは、マンネリズムであって構造調整ではないのです。一巡した消費をもう1、2年の間持続させるための小細工にすぎないので、そう何度も使える手ではないのです。

#### 環境という外生変数

長期的な展望で見る限り、科学技術の発展はまわりの資本主義の唯一の突破口です。

たしかに、人間は急には変化しません。食べる量がいきなり2倍になったりしない。しかし、「こういうものがあればいいなあ」と考える人間のアイデアはつねに湧いてくる。それがあつた限り、科学技術を突破口に経済は、成長し得る。

もっとも、どんなアイデアも、それが商品のかたちにならなければ、その商品に対する欲望は生まれません。この「欲望」という言いかたも実は正確ではなくて、それは決して個人心理のことではありません。ある商品がシステム中で他の変数との関係で合理的に実在できるかという、変数と変数との関係のことを言っているのです。

構造調整が必要だという言いかたもそうなのですが、システムという考え方には前提があります。そこには究極的外生変数とも言うべき、構造調整が不可能な部分があるのです。一方的にその変数の影響を受けるだけで、その変数をこちら側から動かすことができない。それは、簡単に言うと、環境のことですね。環境はシステムの外生変数である。例えば石炭の埋蔵量や森林資源。資源というのは、環境を利用可能なものとみなす場合の言い方ですが、その資源は有限である。資源が少なくなれば当然価格が上がっていく。価格が上がれば利潤が減ったり、GNPが落ちこんだり、望ましくない状態=不景気になっていくでしょう。システムは、そうした外生変数を所与として動いていかなければならないのです。それからまた、社会的な変数のなかでも、人口をそうした外生変数にかぞえることができるかもしれない。人為的に

減らすのがむずかしいからです。人口が増えることは一見よさそうに見えますけれど、増えれば様々な問題が起こります。貧困の問題もそうでしょう。産業社会としてはあと戻りです。しかし、そういった人口問題にしても、システムをうまく機能させれば十分に解決できる可能性がある。

#### 超技術社会へのソフトランディング

地球上にいるかぎり、環境という変数はコントロールしにくい。ですから、地上でシステムを動かすかぎりは環境の上限を考えなければならない。環境と並ぶもう一つの前提には、過去人間が培ってきた道徳や倫理感があります。これを放棄することは非常に難しい。当面はそういった前提の上で、変数を調整していかなければならない。

私の考えでは、そうした調整困難な変数のなかでも、一番調整しやすい変数は人口です。科学技術は確かにひとつの突破口になるけれども、さきほど言いましたように、これは長期的な効果があるのであって、速効薬にはならない。科学技術は、とりあえずは資源の変換効率の問題ですから、あくまで長期的な展望を与えるにすぎない。そうしたいわゆる超技術社会へのソフトランディングするためには、そこに至る曲線がなめらかになるように、様々な変数を調整していかなければならない。そのための現実的な提案として、人口の調整が挙げられるのではないかと思います。

GNPという変数を発明した結果、人口の増加に大きな意味がつけ加わったのは事実です。国民経済の枠内で発想すれば、人口が減ればマーケットが縮小していく。これまでの産業はスケール・メリットのあるものが多かった。重厚長大の時代でした。売上高が多ければ多いほど、単価が劇的に下がって利潤が生まれる。結果、ガリバー型企業が生まれる。日本のVTRや自動車がいい例ですね。だから、人口を減少させようなどと言うと、一億人でぎりぎり成立する産業が数千万人ではうまくいくわけがないと、アレルギー反応を起こす人達も多いのです。でも、おそらくそうではないのです。国際的に企業が展開していれば、国内と国外のマーケットをそれほど分ける必要はないわけですから、人口が何千万に減ろうとそれほど変わりはない。しかも、現状のネックはむしろ土地問題ですから、消費財を購入できる空間的余裕が

生まれれば、まだ消費は伸びていくはずだと思います。

人口が減少することは、省力化投資の面でもチャンスです。省力化投資を合理的に行ない得るための条件としては、人件費が高いこと、あるいは失業率がゼロであることです。省力化ロボットのコストは下がる一方で、人件費は上がる一方ですから、いつかクロスするわけです。クロスしたあと生き残るのは、省力化投資をした企業なのです。そして国際的に見て、もっとも早くそのチャンスに恵まれるのは、高度な工業国であり、人口が急速に減少し高齢化社会を迎え、しかもある程度の蓄積がある国、つまり日本です。ですから、労働力が足りないからといって低賃金の外国人労働者を雇用し、賃金の上昇を押さえるといったことは、決してプラスにならない。

外国人が就業チャンスがないということであれば、現地にビジネスを展開すべきだ。日本が海外投資や市場開放を怠り、その結果たとえば中国が人材輸出を始めて、日本がそういった人材目当てに労働集約型の工場を国内にたくさんつくるといふことになれば、それは最悪です。

こういった問題も、現状のシステムの考え方の中で十分に対応できるはずなのですが、問題はシステムの柔軟性にある。たとえば、本来は労働人口の流動性が高くなければならないのです。年功序列、終身雇用制のようなものは困る。官庁、大学、ビジネス界、政界、ジャーナリズムなどでは、相互に人的交流があつてしかるべきなのに非常に少ない。企業に関して言えば、職能が会社内で評価されているだけで、互換性がないですね。そういった問題はすべて、構造調整のための意思決定の場である、政治と国会の機能が弱体であることに起因しています。構造調整と日常的に取り組んでいかなければならないことを忘れていないですね。構造に対してフリーライダーなのです。これらの点を解決していかなければ、先ほど申し上げたような日本の潜在的な可能性を活かすこともできません。

最後に指摘しておけば、システムの考え方や構造調整の問題は、モダニストたちが延々と言い続けてきたことであつて、80年代以降になって急に現われたポストモダンの人たちとはなんの関係もないことです。

(1992.4.14 談)



# 現実を選びとれるとき

## 初めて宗教を意識

動していく。

「現実の選択」  
宗教というのは我々の現実に関わる問題で、現実をどう定義するかという問題です。我々は誰でも現実を持っていて、自分がどう世界に生かされたのか、どう世界に生きていくのか、という世界に自分の全存在を含む世界のイメージを現実と呼びます。我々はこの現実感覚が無ければ、日々の生活を送れないのです。

ところで、いわゆる宗教というものは、社会が複雑になった結果、現実が何種類も提案され、選びとれるようになって意識される。ある人たちは、神がいると言い、ある人はいないと言います。ある人は死後の世界があると言い、ある人は無いと言います。

# 普通の言葉で宗教を……

宗教教団にはその宗教特有の用語が多く、言語体系も特有のものを持つことが多い。特定の教団の研究では、その教団で用いられる用語を多用せざるを得ない。しかし、宗教を分析する際に、その宗教で用いられている特別な用語を用いず、宗教以外の社会的なものを記述する「普通の言葉」を組み合わせていくだけでも、充分記述しているのではないかと。そういった視点で社会学者・橋爪大三郎氏の宗教研究は始まった。

(聞き手・構成＝東京本社・津井秀夫)  
東京工業大学助教授

橋爪 大三郎



はしづめ・だいさぶろう氏  
昭和二十三年、神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学助教授。著書に『言語ゲームと社会学理論』、『宗教の言説戦略』(勁草書房)、『はじめての構造主義』(講談社現代新書)、『冒険としての社会学』(毎日新聞社)等がある。

## 宗教現象を「読む」

⑥

## 意味は内在して分かる

「価値体系」などとそれぞれ持っているか、これが宗教の核心で、それは逆に彼らの行動の中で実証されていく。ですから、宗教を研究していく際は彼らの行動を考へ、その上で彼らの創り出している現実を理解していくことが大切になる。そしてその現実が再生産されていくか

「価値体系」などとそれぞれ持っているか、これが宗教の核心で、それは逆に彼らの行動の中で実証されていく。ですから、宗教を研究していく際は彼らの行動を考へ、その上で彼らの創り出している現実を理解していくことが大切になる。そしてその現実が再生産されていくか

## 仏陀の言説が価値ある伝承

仏陀の言説が価値ある伝承



# 「わかるくわく」の周辺

社会学 ● 橋爪大三郎

小学校で、足し算やかけ算を習った。中学になって代数を習った。高校では微積を習った。そのたびに、一応「わかった」気はする。でも、その「わかる」とはどういうことなのか、考えてみるとじつに曖昧だ。他人を教えてみると、このことがよくわかる。家庭教師としては「ほら、だからこうなるんだ、わかるだろ？」などと言いつつ、話を先へ進めようとする。でも、子供はぼかんとしている。これはまずい。

ここから先は忍耐だ。同じ説明をもう一度くり返す。簡単な例をあげてみる。だいじょうぶ、君にもわかるはずだ、みたいな雰囲気作りをする。そうやって環境を整え、ひたすら「うん、わかった」と言ってくれるのを待つのだ。

だがどんなに努力しても、うまく行く保証はない。要するに教育は、「わかる」ことの周辺をうろつくだけ。「わかる」ことの核心にズバリと踏みこむものではないのだ。

こんなふうと考えていくと、しまいには、自分で数学を「わかった」つもりになっていたことまで、どんどろ疑わしくなってくる。

L. ヴィトゲンシュタインの『数学の基礎』を読んで、彼もこうした疑問に悩んでいたことを知った。小学校教師の経験もある彼は、ものわがりの悪い生徒に手を焼いたに違いない。そのあと彼は、何年も考えぬき、数学の大部分は根拠を持たないという破壊的な結論に達した。

彼の立場を「厳密有限主義」とよべるだろう。あえてひと言で要約すると、こういう立場だ——数(などの数学的対象)があるから数学が可能、なのではない。数は、われわれが数を数えるから、存在し始める。数学は、数を数えるという行為に還元できる、と言うのである。

この立場だと、数え終わることのない「無限」など存在しない。だから無限集合も存在しない。当然、自然数の集合も存在しない。したがって、ラッセルのパラドックスもゲーデルの定理も、意味を持たない。解析学も代数学も、その主要な部分は成り立たないことになる。

こんな立場に、何のご利益もないから、数学者はふつう彼の立場を無視する。けれども、社会学者の私にとっては、面白い考えだ。社会学はすべてを、人間の社会活動の所産と考えたがるものだ。

両手の基石を、別々に数えたあと一緒に数えれば、足し算になる。逆に数えれば引き算になる。基石を長方形に並べ、縦横、全体を数えればかけ算になる。逆にすれば割り算になる。分数や負の数も、この延長で考えられる。これらの演算をそなえた数(体)の観念が生まれる……。

なるほど、すべては数えることに還元できそうだが。としても、なぜ人間は「無限」を考えられるのか?

ヴィトゲンシュタインは、それは「……以下同様(数え切れない)」ということだと言う。これに半分納得しつつも、私は、数学を「無限をめぐる思考のルール」として再構成できないものかと考えている。

(はしづめだいさぶろう)



# TEA TIME

## 読者の声 現代を知る書物の饗宴 入門のための ブックガイド

『環境倫理学のすすめ』  
加藤尚武  
加藤尚武  
680円

昨年好評に出版された『環境倫理学のすすめ』は、現代倫理学に不可欠な環境倫理学の入門書として、現代倫理学界に大きな影響を与えている。本書は、環境倫理学の基礎的な概念を解説し、環境倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『術語集』  
一頁になることば  
中村隆二  
500円

術語集の基礎書である。この「術語集」は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『現代の哲学』  
木田元  
700円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『はじめの構造主義』  
橋爪大三郎  
800円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『近代をどうとらえるか』  
三島一  
500円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『現代思想のキイワード』  
今村仁司  
800円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『新哲学前門』  
廣松渉  
500円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『現代思想の冒険』  
竹田青嗣  
800円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『続・哲学の冒険』  
内山節  
1000円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『現代思想・入門』  
小阪洋平  
1000円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。

『現代思想・入門』  
小阪洋平  
1000円

本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。本書は、現代倫理学の基礎的な概念を解説し、現代倫理学の発展的な課題についても、わかりやすく解説している。



戸井十月

■「十五年漂流記」ヴェルヌ：三〇年経った今も、結局、大して何も変わっていない自分に気づかされる。それがいいのか、悪いのか……。

■「妖星伝」半村良：面白い。ともかく面白い。こういう小説が書けたらな、と思う。でも、多分、こんな嘘は一生つけない。

■「老人と海」ヘミングウェイ：老いが自分の問題になればなるほど、サンチャゴ老人に魅かれてゆく。座右の書である。

中山千夏

■「昆虫記」アンリ・ファーブル：小さい頃ほど同じ本を何回も読んだ。これは特に、ジャガイモの花フンコロガシ……感動した。

■「悪魔」ドストエフスキー：十代、ただ背伸びして読む。人間研究、政治的体験が深まるにつれ、私の良き友に。カラマゾフの白痴も加えたい。

■「紅梅」曹雪芹：とにかくおもしろい。ウー・マンリブの心に叶う。古事記と並んで、漢字文化への私の入り口となった。

西垣通

■「トニオクレ」ケルト・トマス：少年の頃、世界に対する自分の構えや感受性を決定したのは、こういう種類の書物ではなかったらどうだろうか。

■「技術と文明」ルイス・マンフォード：科学技術のパノラマ的な発展史を芸術的感性から語った稀有の一冊。将来の進路を照らしてくれた。

■「族長の秋」ガルシア・マルケス：恐るべきエネルギーを秘めた文字空間が、いま地球上で発生していると実感させられた作品。

野谷文昭

■「宮澤賢治集」(角川版「昭和文学全集」)宮澤賢治：四歳頃、集中の童話を母に読んでもらい、その後自分で読んで、オノマトペの魅力や宇宙との交感に没入する。

■「赤と黒」(新潮社版「新版世界文学全集」)スタンダール/小林正訳：徹夜で読んで最初の本。中二だったと思う。ジュリアンの個性に惹かれ、物語の面白さを堪能した。

■「輝ける碧き空の下」北杜夫：求心的で狭くながちな日本文学の枠を、ユーモアとスケールによって打ち破ったことに感動、勇気づけられた。

橋爪大三郎

■「不思議なメカニクス」武井武雄：欲しいものが見える不思議な望遠鏡。皆が奪い合って覗くとわけのわからないものが見える。軍国絵本の傑作。

■「構造人類学」レヴィ・ストロース：マルクス主義がふりまいた「歴史の呪縛から自分の思考を解き放つてくれた。構造主義樹立を宣言する古典。

■「自分の本ですわね」私：結局、自分に一番決定的なインパクトを与えたのは自分の本ですわね。勝手だけ。

橋本治

■「ないんですよ」子供時のおぼやちやんの隣で「本読んで」ってやってた講談社の絵本が決定的だったかな。

■「怪物のユートピア」種村弘弘：本書によって漫画・映画・博物館にまさるとも劣らぬ評論の面白さを知らされ、評論を書く意欲をそそられた。

■「フロン」資本主義と開拓野：哲学者プラトンではなく、喜劇詩人アリストファネスこそが真の思想家であることを教えられ、驚嘆した。

堀切直人

■「鉄腕アトム」塚治虫：今では不満もあるが、漫画と映画が好きで昆虫マニアであつた少年時代には雑誌「少年」連載中から熱中した。

■「戦争と平和」トルストイ：ナポレオン時代のヨーロッパを舞台に繰り広げられるドラマに政治的、そして人間の光と影を見た。

■「男子の本懐」城山三郎：金解禁に命を賭けた井上進之助の生涯をたどりながら、大衆に迎合しない政治家の姿をみことに描いている。

舛添要一

■「動物記」シントン：雄大な自然。そしてその中で生きていく動物たち。また彼らの人間とのかかわりに感動したものである。

■「季節」中島敦：ラジオの朗読を聞き、翌日書店に走った。響きのよい端正な文章に憧れたこともある……。

■「アフリカの白昼」アイザック・ディネン：アフリカ大地の生活のにおいを強烈に感じさせてくれる。素直でまっすぐな考え方が抜群。

増田みず子

■「ロビンソン・クルソー」デフォー：初めて小説世界の楽しさを教えてくれた作品。ジュニア向き文学全集を端から読んでいった。

■「また来てないとは思って」

D. Hashizume

資本主義のダイナミズムは、「自由」に裏づけられた「技術」によって保証される

橋爪大三郎

東京工業大学助教授



写真/藤谷清美

この十年ほど、いわゆる経済のソフト化、バブル現象というものが目立ち、あたかもそれが資本主義のメイントレンドであるかのようになりなされる節がありました。しかし、そうした現象は本質的な意味で価値をつくるわけではなく、資本主義のメイントレンドはあくまでも製造業です。そして、そのダイナミズムは技術にあります。技術というものは限られた資源をより有効に利用して、付加価値を高めることに本質があります。

今日地球がますます狭くなっているといわれますが、地球が狭いというよりは、環境に限られ、資源が有限なことで、技術に対する要求はますます強まり、技術大国日本の重要性もますます高まっているわけです。したがって、一部にある製造業悲観論は、まったく杞憂にすぎないと思えます。

ただ、これからの技術・製造業というものは、公共性を否応なくテーマにせざるを得ないでしょう。

技術というものは、土地や、水、空気と同じように公共財だと私は考えます。

これからの企業はそこを考えたいかなければならないと思います。ですから世界的貢献という見地からしても、日本は技術の適正な配分ということを考慮していかなければなりません。

旧社会主義圏への支援、地球環境問題の解決等、課題は山積していますが、そのひとつに第三世界への技術移転の問題があります。

今日、限られた資源、パイの分配をどうするかというとき、一番いい方法は技術移転をすることです。つまり、第三世界に高度な技術をもつてもらい、先進国と同じマーケットで競争できるという土台を作ってもらいます。その上で資本を移転していかないとムダになります。限定的にその国で使えるような技術をうまく設定してローコストで移転していくことを考えなければなりません。

そういう点で、日本の製造業の新たなビヘイビアが期待されているわけです。もちろん、そのような公共的なプロジェクトに対しては、税制面などで優遇する必要があります。

さて、ある製造業では「3K」という悪いイメージが敷衍され頭を痛めています。でも、「3K」業種というようにキツイ、キタナイ、キケンな労働に対して、みんながそれをやりたがらないという現象は、自由な労働市場が成立している限り、当然起こりうることで、正常な現象だと思えます。

ただ、そういう業種を外国人労働者で埋めていくという考え方は間違っています。なぜなら、資本主義社会の最もよいところは、倫理的に優れているところは、奴隷経済ではない、ということです。奴隷経済では二種類の労働、二種類の人間がいます。けれども資本主義社会には一種の人間しかいません。人間の価値はみな一様だということです。

今日、限られた資源、パイの分配をどうするかというとき、一番いい方法は技術移転をすることです。つまり、第三世界に高度な技術をもつてもらい、先進国と同じマーケットで競争できるという土台を作ってもらいます。その上で資本を移転していかないとムダになります。限定的にその国で使えるような技術をうまく設定してローコストで移転していくことを考えなければなりません。

そういう点で、日本の製造業の新たなビヘイビアが期待されているわけです。もちろん、そのような公共的なプロジェクトに対しては、税制面などで優遇する必要があります。

さて、ある製造業では「3K」という悪いイメージが敷衍され頭を痛めています。でも、「3K」業種というようにキツイ、キタナイ、キケンな労働に対して、みんながそれをやりたがらないという現象は、自由な労働市場が成立している限り、当然起こりうることで、正常な現象だと思えます。

ただ、そういう業種を外国人労働者で埋めていくという考え方は間違っています。なぜなら、資本主義社会の最もよいところは、倫理的に優れているところは、奴隷経済ではない、ということです。奴隷経済では二種類の労働、二種類の人間がいます。けれども資本主義社会には一種の人間しかいません。人間の価値はみな一様だということです。



登場8回・第5位…青春時代と「老境」と



登場6回



このわたしがつてきた世代経験は、そこにとどまるなら、現実的な根拠をもうもたない。普遍的ではない。社会が悪であるという確信は、たぶんマルクス主義が体現していた「理想」と無縁ではないだろう。わたしはマルクス主義者でも何でもなかったが、その「余得」にはあずかっていたことになる。

普遍的な真理というものは不思議な生き方をするものらしい。数年前、宮崎勤の事件が起こった時、その同世代人はこれを自分達の連合赤軍事件だと感じたという話だが、その直観は正しい。擬似現実への内閉や拒食症の果ての死に、観念的に倒錯しようにもその倒錯する観念すらもてずに生きなければならぬ人のぶつかる困難が、そこに、顔を出しているのである。

わたしの言いたいのは、こういうことだ。

「世代」論は一般的に愚劣だが、その一般的な愚劣さの理由はそれが共同性を基礎にしていることにある。しかし共同性への反発は共同性の裏返しにすぎない。人はそのようなものではないか、ということ自体がそもそも問題として立たないのである。人は誰しもその固有な経験から理由を受けとり考えることをはじめる。その時同時に受けとる時代的な制約が考えることの足枷となる時はじめて、彼は、それを脱する理由をもつ。

(かとう のりひろ・文芸評論家)

### 日本人に社会科学ができるのか?

橋爪大三郎

日本人はよほど社会科学に向いていないのではないかと、暗澹たる気持になることがある。

知力に問題があるとは思わない。ただ、社会を厳密に考え抜くだけの徹底した論理性、傍若無人な強情さが、われわれ日本人にはしばしば決定的に欠けているように思われるのである。

科学するとは、前提となる事実や仮説を承認し、そこから論理的に導ける帰結をすべて導くこと。しかもそれらの帰結をわがこととして受け入れること、を意味する。社会を科学する場合も同じだ。自分や、身近な人びとや、見知らぬ他者たちのふるまいや考え方を、遠慮もためらいもない論理の刃で切り分けていくこと。それには、人間関係の軋轢などいささかも恐れない強靱な言葉づかいが必要である。

かりに、社会学者として理想的な能力をそなえた人物がいたとしよう。彼は日本

人に歓迎されるだろうか。あまり歓迎されないだろう。それどころか、変人扱いされ、仲間外れにされてしまいかねない。冗談でなく、私はそう思う。それほど日本人であることのフォーマットは、社会学者のあり方と相容れないのだ。

日本人も当然、社会を営んでいるわけである。そこには、政府も企業も学校も、地方自治体も家族も軍隊もある。それらはいちおう機能している。一部の日本人は、自分たちの社会がどの外国と比べてさあ効率的だと、奇妙な自負を持ち始めてさえる。日本社会が効率的だとすれば、それは、当然支払うべきコストを省いているから。つまり、人間の可能性を限定し、予測可能な一定の枠内に日本人の行動を押し込めているからだ。学校や家庭の教育は、主にこれを目的にしている。企業はその成果を、最大限に利用する。日本社会とは、日本人の、日本人による、日本人のための社会なのである。

もつとも日本人に、この自覚はない。自分や他人の行動を、積極的にある枠に「押し込め」ているなどと、思っていない。ただ多くの場合、日本人が「人間」と言えば、それは日本人のことなのである。日本人以外にどういう人間のあり方が可能か具体的に知らなければ、結局は同じことである。

このため、政府も企業も学校も軍隊(自衛隊)も、日本の機能的な組織はどこかちぐはぐである。国際的な規準で動かなければならないときに、適切な行動ができない。

責任ある地位の人びとが、社会科学の訓練を受けていないのだ。

社会科学は「価値中立的」である。これを日本人は、学校秀才が洋書と首つびきでもの知りになり、現実社会に関係しないことと思いきんだ。そうではない。社会科学は、あくまでも社会的な意思決定の「前提」なのである。決定(それは特定の価値観にもとづく)をしたいからこそ、その前提(社会がどのようなものであるかという情報)は客観的(価値観から独立)である必要がある。さもないと、意思決定が的はずれなものになってしまうからである。

日本人は社会科学を誤解し、そして軽視した。その結果、国際社会の動向を、日本人のナイーブな情報收拾のやり方で探らざるをえなくなっている。えられる情報は、希望的観測で膨れあがってしまう。オリンピックのメダル獲得予想を思い浮かべるとよい。これを笑えないのは、対米開戦の決定も、日本の対外交渉も、まったく同じ轍を踏んでいるからだ。

経済大国を自認する日本が、政治・軍事・外交・科学・文化の面でどうしようもなく立ち遅れているのは、社会科学を軽視しているせいである。そう言ってもよい。——だがこのことを、日本人は気付くだろうか?

(はしづめ だいさぶろう・社会学)





## OPINION



# A Cure for Political Cancer

## Party Leaders Chosen by Voters Would Lessen Corporate Political Influence

By Daisaburo Hashizume

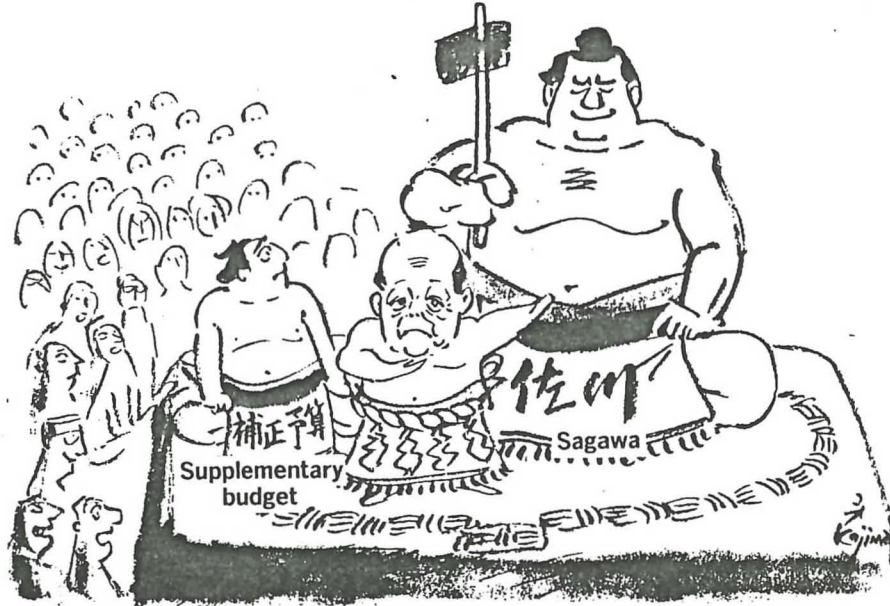
People are shocked and angry over reports of shady transactions in the political community, and over the alleged mob links of a former prime minister and prominent Diet members. Certainly it is important that the Diet and the courts pursue these matters until the full picture emerges, and until the politicians responsible are held to account. But even more important is that the public be absolutely clear on where it stands regarding an inescapable fact of life—that politics does cost money.

Throwing all the blame on the politicians is too easy, and furthermore, as we are seeing, does not solve the problem of political corruption. During the half-century since the end of World War II, Japan has been rocked by one political scandal after another. By now it should be dawning on people that the largest share of responsibility lies with themselves.

Remember the late Fusae Ichikawa. She believed in "ideal elections" in which money played no part—and she put her ideas into practice, winning in the process strong popular support. The newspapers approved too, and insisted that the other politicians, those who relied on money, were on the wrong track.

But it remains a fact that money is a necessary ingredient in politics. It cannot be otherwise. Staff salaries, telephone bills, postage and office expenses alone add up to several hundred million yen a year. The real question is, who should be paying these bills, and how?

Instead of focusing on this, however, would-be reformers have allowed themselves to be distracted by dreams of



Sagawa outweighs budget in an extraordinary tournament. By Ko Kojima

cost-free politics. This is fine for people like Ichikawa, who apparently can get themselves elected by campaigning for "ideal elections."

But to try to force all politicians into this mold would be unrealistic and, worse, irresponsible. It would only drive underground all political fund raising that is not officially approved. Just as American gangsters thrived on Prohibition in the 1920s, corruption in Japan is being fostered now by the Political Funds Control Law.

So, let's turn the argument around. Let's start by supposing that money is indispensable in politics, and create political parties that can raise money in a proper way. A good beginning would be to form a party capable of practicing the opposite of what the Liberal Democratic Party has been doing.

Within the LDP organization, money flows from the top down. LDP Diet members advance their election prospects by setting up their own private support groups. Maintaining these groups requires vast sums of money,

which is made available to Diet members by their faction bosses, whose generosity is the basis for their own power. But who fills the bosses' wallets? The bosses depend on political contributions from industry and various pressure groups. A good deal of tainted money is mixed up in these contributions.

What if, instead, politicians were to receive the money they need from the voters in their electoral districts? Then, the factions would no longer be necessary, and the cozy relationship between politics and industry would be severed.

That of course begs the question of how the voters' wallets are to be pried open. One idea which I think has potential is a "party member ticket system." This would involve arranging the Japanese equivalent of American primaries and party member assemblies.

For a long time, the Social Democratic Party of Japan has been waging a campaign to build its party membership up to a million people:

"We're short of money, so please join our party; no, you won't have a say in determining policy or choosing candidates, that will be up to the party executive." Under those terms, who would be interested? Not surprisingly, the campaign has been a failure, and membership has increased scarcely at all.

The "party member ticket system" would be completely different. People would buy admission tickets and assemble in a public hall or gym, where candidates would be elected in a primary-style election. A candidate would begin his or her career at the municipal level, and rise through the ranks to candidacy for an electoral district. Candidates would no longer be chosen by party bosses.

The plan's interest lies in the notion that the rank and file would themselves choose policies and their candidates. Whoever buys an admission ticket is a "party member" for that day.

There would be none of the wary hostility typically provoked by membership

recruiting drives. These assemblies could be vehicles for the airing of policy controversies, political fund raising, even for the formation of volunteer networks.

The best thing would be to establish a new party based on this system, but perhaps the old familiar Socialist party will serve our purposes just as well. The SDPJ has exhausted itself in sterile wrangling over the Japan-U.S. security arrangement and the constitutionality of the Self-Defense Forces. This should be stopped immediately. Party policy should be left up to the electorate to determine. Once that has been done, and the ideological problems got out of the way, the possibility of cooperation with other opposition parties opens up. Komeito and Japan Communist Party supporters could also buy tickets and participate in the SDPJ primaries, and their candidates be officially recognized by the SDPJ.

If this procedure, whether carried out by a reformed SDPJ or by a new party, works well, it could set the stage for an effective challenge to the LDP machine. A party structured along these lines could conceivably defeat the LDP even if the electoral districts are reduced to single-seat constituencies.

Their plan is no quick fix for democracy. It will need to be carried out with determination, and without haste. Results will take time. But if the spate of political scandals can be turned into an opportunity for reform, it will have proved a blessing in disguise.

\* \* \*

The writer is an associate professor of sociology at Tokyo Institute of Technology. This article originally appeared in Japanese on the Asahi Shimbun "Culture" page on Nov. 11.



# 辛口5氏が分析する 「皇言政治家」 竹下登はなぜ 辞められないか

松江(島根県)から同じ飛行機に乗り合わせたとき、竹下の到着を待たため、飛行機の出発が遅れていた。竹下は飛行機に乗ってくるなり、乗客に向かって頭を下げてから席に座った



橋爪大三郎  
●はしづめださいぼう／東工大助教授・社会学

ものだ。人間関係に敏感な体質が染みついている、という印象を受けた。  
竹下は最大派閥の権力者に絶対服従しながら時期を待ち、子分をつくっていた。角衆の手

## コンプレックスから反対派へ 異常な恐怖

法を踏襲し、内外のナンバー2を次々と倒し、大きな派閥をつくつければ絶対権力が握れることも学んだ。  
ただ、田中がスキャンダルに倒れ、派閥を乗っ取られた末路を見たことで、不満分子をつくらないことに執念を燃やした。竹下流の合意の政治は、消費税のときのように反対者をつくらないで押し切ってしまうことだ。  
竹下には反対派への異常な恐怖がある。その根幹には、自分

の能力にコンプレックスがある。竹下は、仲間を増やし、祭り上げられることで権力を維持しようとする。反対派をつくらせないようにするために、ますます金権体質とならざるをえなかった。  
金権スキャンダルが発覚しないように三重、三重の防護壁もつくった。暴力団と同じように鉄砲玉を用意し、その人たちが犠牲となった。  
矢面に立ったとき、たれを抑えればよいか腐心することで権

力を維持してきた。それだけに、皇民党事件では、だれが背後でやらせているかと恐れ、敏感に反応したのだと思う。身内のかほかの派閥なのか発信源をさぐり、関係スジに収拾をやらせたのだろう。



## 随想

「多数決で決まったことには絶対従わなへんや」ならないでしようか?」学生が手を挙げて、こう質問した。すると、講演を終えたある高名な思想家はしばらく考え、こう答えたそうだ。「そういう大事なことは、多数決の前に決めておいたほうがいいね」。

自分がいっぺん、民主主義を大に喰(く)われろと、若いころの私は思っていた。民主主義がなくて、社会主義や共産主義があるからいいやと、ほかに考えていた。そのうちさすがに、それではいとわかってきた。社会主義も共産主義も、大したものではないらしい。それに比べて、実際に社会生活を送るうえで、民主主義のやり方は現実的で役に立つ。そういう経験が重なって、私は筋金入りの民主主義者に生まれ変わった。と決心した。

自分では無後退になるだけ何の解決にもならない。それを承知で、わざと答えたのだろう。民主主義は、どんなに手続きを大切にしても、その原則だけで一貫することはできないのである。こういう怪しい(けいじ)民主主義者に生まれ変わるうと決心した。と、こころが若いころの不勉強がたたって、民主主義の本質がどこにあるのかよくわからない。不合理な手続きにこだわらなければならぬ理由が、もつと(つ)腑(ふ)に落ちない。仕方ないから、

## 民主主義を考えてみよう

橋爪大三郎

「多数決で自分の意見が負けると悔しかった。自分が正しいと思うので、先文句を言っていると、先生に、もう決まったんだから忘れなさいと言われた。なにが少数意見の尊重だ。民主主義なんか嫌いな。日本は政治はあまりに心弱である。

「多数決で自分の意見が負けると悔しかった。自分が正しいと思うので、先文句を言っていると、先生に、もう決まったんだから忘れなさいと言われた。なにが少数意見の尊重だ。民主主義なんか嫌いな。日本は政治はあまりに心弱である。

だから民主主義なのである。役に立たない奇妙なテーマの現代思想はもういい。考えるべきことを順番に考えよう。地価をどうする。農業をどうする。政治改革をどうする。教育をどうする。ODAをどうする。外国人労働者をどうする。大学をどうする。問題は山積している。それをきちんと議論し、議論を尽くしてコンセンサスに至るのが民主主義だ。九〇年代は政治の時代、民主主義の時代なのである。



橋爪大三郎氏

▽はしづめださいぼう  
一九四八年神奈川生まれ。東京大学文学部卒。現在、東京工業大学助教授。専攻、社会学。著書に「現代思想はいま何を考えればいいのか」「民主主義は最高の政治制度である」「小室直樹の学問と思想」などがある。



大川隆法の「幸福の科学」が、瞬間に百万を超える信者を獲得し、オウム真理教も依然として世間の関心を集めている。このように宗教が、多くの若者の心を捉えているいっぽう、まったく関心がないという顔をしている人びとも大勢いる。日本人はいつたい、宗教性に富んでいるのか、それとも、根っから宗教に無関心なのだろうか？

日本人は、宗教を信じやすいとも言えるし、ちっとも信じようとしないうとも言える。一見正反対の傾向があるわけだが、実は両者は、同じ根から発したものである。そのことを理解するには、宗教とはどういうものかをおさらいしてみるとよ。

# 「宗教」である間は、 宗教はだめ

橋爪大三郎 (東京工業大学助教授)

する法則なら、それは科学だ。そして、前提するのが人間の霊魂や神や死後の世界であれば、それは宗教だと言える。

日本人はずっと、宗教は「死後の世界」を扱うものだと思いきんできた。これは、江戸幕府の政策によって、仏教がすっかり骨抜きにされ、葬式仏教になってしまったことの結果である。死後のことにしかタッチしなければ、宗教と、人びとの現に生きる現実社会との関わりは断ち切られる。こうして、宗教と現実社会とが切り離されたからこそ、宗教を軽くみるという、日本人に独特の傾向が生まれているのだ。

官僚も、政治家も、知識人も、ビジネスマンも、責任ある立場にある日本人は、だいたいにおいて、本気で宗教に関わるなど、精神的に未成熟な人間のことだと、どこかで考えている。世の中を十分に理解すれば、宗教など

信じないですむはずだと思っっている。自分は何も信じていないと考え、無宗教であることを誇りにする人びとが多い。そのため、日本人は、一見するときわめて現実主義的であるかのような印象を与える。

けれども、日本人の考え方は、現実主義にしては中途半端で、本物ではない。本当の現実主義は、徹底してありのままの現実を見すえ、どういふ他者が何を考えているかについて、冷静で客観的な像を作り上げるものだ。しかし、日本人は一般に、そこまで透徹した世界像をつくりあげようという動機に乏しい。やはりそれには、ユダヤ教やキリスト教のような、絶対の神の存在が必要なのだ。神の視線に晒されるからこそ、客観的な事実が浮き彫りになり、自分や他者たち(人間)の誤り(主観性)を指摘することもできる。

神の存在はフィクションである。それは、社会のなかに、誰の利害や思惑か

らも独立した情報の秩序を打ち立てようとする技術である。政治も経済も法律も、ジャーナリズムも、ヨーロッパの文明の生み出した近代的な制度はみな、そうした技術を下敷きに成り立っているのだ。

いっぽう日本の社会は、もっと別の技術で動いている。それぞれの集団が目一杯に自己の利害を守り抜こうとする、局部的(ローカル)な技術の寄せ集めだ。どの集団も、既得権を守り、集団の存続をはかることしか考えていない。そうした利己的な行動をとっていると、社会が全体としてどういふことになってしまおうのか、まったく思い及ばない。

日本人の場合、宗教に対する関心が薄いようにみえるのは、自分の属する集団のほうを宗教よりも重視せざるを得ないからである。社会は、いろいろな集団からなっている。誰もが自分の属する集団を重視するなら、そうした

集団を越えた、人びとの共通な行動前提(宗教)を成り立たせるのは当然むずかしくなる。

日本では、毎年かずかずの新興宗教が生まれるけれども、日本社会を根底から作り変えるほどのパワーを発揮するものは見当たらない。なぜならどれも、これまで日本人が考えてきた宗教の枠のなかに収まっていて、政治や経済、法秩序についての具体的なプランを持っていないからである。人びとの行動前提全体を、組み換えるまでの射程を持っていない。そうした宗教はいくら出てきても、現実社会にタッチしないというこれまでの「棲分け」を、踏み越えるものではない。

かくして新興宗教は、よくても概ね国民の一〇パーセント足らずに受け入れられたところで、頭打ちになる。既成宗教教団の反撥や、宗教を軽視する社会の壁に阻まれて、ただの「宗教」に終わってしまうのである。



# 老人「問題」を解決するには

東京工業大学工学部助教授  
橋爪 大三郎

若者に有利な近代社会

日本の昔話には、よく、いいお爺さんとお婆さんが登場する。『コブ取り爺さん』や、『花咲か爺さん』がそうです。善玉と悪玉の登場人物の対比で物語が成り立っているわけですが、こういう昔話を中国人に話して聞かせると、ボカンとするばかりで話の前提から理解されない。儒教の影響が強かった中国では、「老人に悪人はいない」というのがたてまえだから。人間は、年をとることに完成されていくことにならなければならないので、高齢者を敬わなければならないというのが社会のルールなのです。

本来、技術の変化が少ない伝統社会では、いちばん知識をもち判断力があるのは老人である。仕事の面でも、経験によって勘を磨き、技術を身につけていくわけだから、年をとることは怖くない。というより、長い人生を生きてきた自信を備え、まわりからも敬われるのが老年期なのだから、たとえ体力は衰えても元気でさえあれば意気軒

昂と過ごせる。

人類の長い歴史では、年をとることを評価する老人観が一般的であった。むしろ、高齢であることにマイナスイメージをもち、老人「問題」などというものを考えてしまう現代社会のほうが特殊だといえよう。

では、なぜ近代社会は、老人に対していいイメージをもちにくいのか。ひとつは、人口構成。若者・中年が多数を占める現代の年齢構成では、その年代を中心としてマーケットが成り立っているため、老人は片隅に追いやられてきた。若さばかりが賞美され、老人の実像がどうなっているかなど誰もまじめに考えなかった。

もうひとつの理由は、近代社会が若者に有利な社会であるため。明治以前の伝統社会では、武家も農家も単独制統制だった。長男が家を継ぐわけだが、それは生きていくために必要な「技術」や、家や農地といった「財産」を手に入れることにはかならない。そこでは老人、とくに親を敬い大切にすることが、社会道徳の一部とし

てプログラム化されていた。

それに対して、近代社会は核家族。子育ての目標も家業とは関係なく、いい学校、いい会社に入るかといった社会的評価を重視せざるを得ない。しかも、この社会では急スピードで技術革新が進む。十年、いや三年もたてば、技術革新のおかげで、昨日まで使えた技術が今日は使えなくなってしまう。親と子供の年齢差を約二〇歳と考えても、親の知識が子供にも役に立つという保証はどこにもない。新技術を覚えやすい若者に有利な社会が近代社会なのだ。

こうした社会のなかで、老人は社会構成員としてのきちんとした位置を失いました。福祉の対象という面が強まってきた。若年層へは増税の要因として、厄介なお荷物というマイナスイメージのレッテルが貼られてしまった。

若者世代を牽引する  
老人文化の創造を

しかし、いくら昔はよかつたといつても、またぞろ明治時代以前の伝統社会に戻することはできない。昔とは違う新しい仕組み——老人の生活の喜び、楽しみを積極的に見出すことのできる仕組みを新しくつくっていくかなければなりません。

それにはまず、固定観念を捨てること。老人は保護しなければならぬ、頭が固くて付き合えない、などといった十把一絡げの決めつけをなくすこ

と。若者でも、ワンパターンの思考の持ち主もいるし、逆に、長い年月のさまざまな経験を通して柔軟な思考を身に付けた老人もいる。老人は老人だという決めつけこそ、固定観念の最たるものといえるだろう。

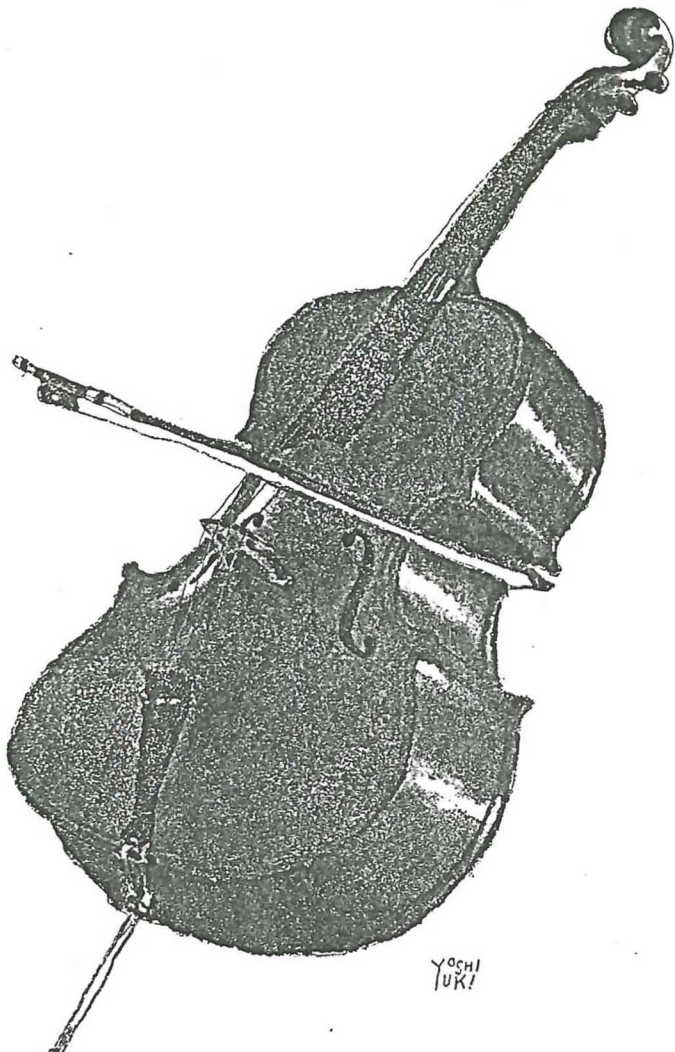
現代のように、生き方の違いや選択の幅がいろいろある社会では、一人ひとりの違い、すなわち個性に重点を置いた付き合い方が大切なのです。年齢によって人をくくらなくても、趣味や専門といった共通言語があれば、年齢を超えた交流ができるはずだ。

たとえば、某大学のラグビー部には、九十代の名物監督がいる。自分で走り回らなくても、チームを導く作戦やノウハウをもつ頭脳として、若者に指図を送ることができている。ラグビーというルールの変わりぬ共通言語がある限り、若者にとっても監督の指導は有益な情報として、またアドバイスとしてプラスになる。

スポーツ、文学、音楽、ファッション、なんでもいいのです。ひとつのことに打ち込んでいる人は年をとらないう。自分のライフスタイルを見つけて、掘り下げ、他者との間に有意義な接点をもつこと。それが、世代を超える方法ではないだろうか。

老人自らも、自分のもっている知識と経験、財産を使つて、自分たちの手による新しい文化をつくることをめざしたい。そして、他の世代を牽引するような老人文化を生み出してこそ、老人の自立も本物となるだろう。(談)

1992-11-12



はしづめ だいさぶろう  
1948年神奈川県生まれ。  
東京大学文学部社会学科卒業、  
同大学大学院博士課程  
(社会学専攻)単位取得退学。  
89年から現職。著書に「現代思想は  
いま何を考えればいいのか」  
「冒険としての社会科学」  
「はじめての構造主義」などがある。

# 新・高齢化社会

エイジレスの発想を浸透させるために



Wishing the Lively Aging Society.

日本ではいま、急速な高齢化が進行している。長寿社会を明るく活力あるものにするためには、総合的な社会整備を行うとともに、「高齢」に対する意識改革が急務である。社会の重要な構成員である高齢者の豊富な知識や経験・技術を活かせる土壌をつくり、意識面では、私たち、そして高齢者自身も「余生」といった消極的観念を捨て、健康で生きがいのある積極的な社会生活をもつことこそ「新・高齢化社会」につながるだろう。



# 政治腐敗防止 私の提言

— 5 —

秘書やブレインなど専従スタッフの人員費や通信費、事務所の経費だけでも年間数億円。こういう費用を誰が負担すべきかを議論すべきなのに、金をかけないのがいいことになってしまった。市川房枝さんみたいに、理想選挙を掲げて当選できるのはいい。し

とられている限り、日本の民主主義はそれ以上前へ進めない。

戦後繰り返された政治腐敗は、  
①政治に金がかかる  
②政治家が無理な資金集めをする  
③それがばれてスキャンダルになる、という構図だった。皇民党事件は、④右翼が政治家を脅す  
⑤暴力団を使って  
⑥もみ消そうとする  
⑦もっとスキャンダルになる、と輪をかけている点が目新しい。

市川房枝さんという人がいた。金のかからない「理想選挙」を

秘書やブレインなど専従スタッフの人員費や通信費、事務所の経費だけでも年間数億円。こういう費用を誰が負担すべきかを議論すべきなのに、金をかけないのがいいことになってしまった。市川房枝さんみたいに、理想選挙を掲げて当選できるのはいい。し

これを維持するのに莫大(はくた)いな金がかかる。派閥のボスはこの金を派内の国会議員に配って、勢力を保持している。ただし彼らも、自分の財布は空なので、業界や圧力団体からの政治献金に頼らざるをえない。そこには相当怪しげな金も混じっている。こうして、上から下へと金が流れ

この金の流れの向きを反対にしよう。選挙区の有権者が、必要な資金を政治家に提供する。そうすれば、派閥なんかなくなってしまう。業界との癒着も断ち切れるはずだ。問題は、どうやって有権者の財布を開かせるか。私は「党員チケット制」がいいと思う。アメリカの予備選挙や党員集会を、日本流にアレンジしたものだ。

## 「党員チケット」買い 自分たちで候補者選出

### 予備選挙

橋爪 大三郎



東工大助教授 (社会学)

はしづめ・だいさぶろう  
一九四八年、神奈川県生まれ。東大大学院博士課程修了。八九年から現職。著書に『はじめての構造主義』『民主主義は最高の政治制度である』など。

かし、すべての政治家にそれを押しつけるのは非現実的だし、無責任というものだ。そこで、当然、公認されなかった政治資金は地下にもぐる。禁酒法がギャンクをはびこらせたみたいに、政治資金規正法が腐敗に手を貸しているのが、皮肉な日本の現状なのである。市川房枝主義に

この金の流れの向きを反対にしよう。選挙区の有権者が、必要な資金を政治家に提供する。そうすれば、派閥なんかなくなってしまう。業界との癒着も断ち切れるはずだ。問題は、どうやって有権者の財布を開かせるか。私は「党員チケット制」がいいと思う。アメリカの予備選挙や党員集会を、日本流にアレンジしたものだ。

金丸氏、竹下氏が皇民党の街頭宣伝におびえたのは、どうして知られたくない大きな秘密をかかえていたからではないか。真相は不明だが、そう見られても仕方ないだろう。政界の裏工作や暴力団とのつながりに、国民の怒りが高まっている。事件の全体像を国会や法廷の場で明らかにし、関係した政治家の責任を追及するのは大切なことだ。けれどももっと大切なのは、

行し、国民に強くアピールした。新聞も、こういうやり方が正しく、政治に金をかける他の政治家が間違っている、と書き立てた。政治に金はいらないし、かけてはいけない——これは、イデオロギーである。これを「市川房枝主義」とよぶことにしよう。けれどもやはり政治には金がかかる。かかって当たり前である。

これを維持するのに莫大(はくた)いな金がかかる。派閥のボスはこの金を派内の国会議員に配って、勢力を保持している。ただし彼らも、自分の財布は空なので、業界や圧力団体からの政治献金に頼らざるをえない。そこには相当怪しげな金も混じっている。こうして、上から下へと金が流れ

この金の流れの向きを反対にしよう。選挙区の有権者が、必要な資金を政治家に提供する。そうすれば、派閥なんかなくなってしまう。業界との癒着も断ち切れるはずだ。問題は、どうやって有権者の財布を開かせるか。私は「党員チケット制」がいいと思う。アメリカの予備選挙や党員集会を、日本流にアレンジしたものだ。

この金の流れの向きを反対にしよう。選挙区の有権者が、必要な資金を政治家に提供する。そうすれば、派閥なんかなくなってしまう。業界との癒着も断ち切れるはずだ。問題は、どうやって有権者の財布を開かせるか。私は「党員チケット制」がいいと思う。アメリカの予備選挙や党員集会を、日本流にアレンジしたものだ。

- 橋爪大三郎
- 1 山本七平「現人神の創作たち」
  - 2 ハッラーフ「イスラムの法」
  - 3 橋爪大三郎「冒険としての社会科学」
  - 4 宮崎市定「論語の新研究」
  - 5 ヴァイトゲンシュタイン「論理哲学論考」
- 思索の根本をかたちづくる。それが宗教であり、哲学である。だが古典として読みつがれるそれらは、一般人にとって、言語の壁時代の壁に阻まれてしばしば近づくにくい。造本や定価の面で、また専門家が細心の解説を付することにより、それが同時代の多くの人びとに手の届くものとなっていることが、文化なのだと思ふ。
- (東京工業大学助教授・社会学)

- 島田裕巳
- 1 マクファーランド「神々のラッシュアワツ」
  - 2 創価学会教学部編「折伏教典」
  - 3 森谷とみ「回想・新しき村」
  - 4 柳川啓一「祭と儀礼の宗教学」
  - 5 八島英雄「中山みき研究ノート」
- 今、大学の教師の悩みは、学生に説き及ぼす本が仲々手に入りにくいところにある。特に宗教関係の書物は、刊行された部数も少なく、絶版になりやすい。あるいは、方針が変わって消えてしまうものや、自費出版的なものなど、学者の論よりも生の声が届くものが多い。
- (日本女子大学助教授・宗教学)

- 山折哲雄
- 1 服部之総「視察ノート」上・下
  - 2 阿部次郎「徳川時代の芸術と社会」
  - 3 堀一郎「遊幸思想」
  - 4 平泉澄「寺社と社会の関係」
  - 5 E・H・エリックソン「ガンディーの真髄」
- 1は戦後の観音研究の出発点となる名著。2はヨーロッパ近代の視点で日本近世を見直した著者の最も本格的なもの。3は日本中世を超えようとした画期的試み。4は日本中世を鋭い史証史学の方法により分析したもの。5は歴史心理学のすぐれたケーススタディであり、前者は中年期、後者は青年期の精神の危機を扱ったもの。
- (国際日本文化研究センター教授・宗教学)

この金の流れの向きを反対にしよう。選挙区の有権者が、必要な資金を政治家に提供する。そうすれば、派閥なんかなくなってしまう。業界との癒着も断ち切れるはずだ。問題は、どうやって有権者の財布を開かせるか。私は「党員チケット制」がいいと思う。アメリカの予備選挙や党員集会を、日本流にアレンジしたものだ。

アンケート 私が『ちくま学芸文庫』に期待したい本 (到着順)

創刊 ちくま学芸文庫

(到着順)



### 岩倉・水林報告へのコメント

橋爪大三郎

学会大会の開かれた一九九一年十一月は、ちょうどソ連邦が正式にその歴史の幕を閉じる直前だった。その年の八月にモスクワで保守派のクーデターがあり、それに屈しなかったエリツィンのロシア共和国が民衆の信任を獲得した。あべこべに、共産主義の幻想は最後の止めをさされた。「所有論」をテーマとするこのシンポジウムが、そういった重苦しく、先行きの不透明な時期に準備されたことに注意すべきだろう。さて、岩倉・水林両氏の報告は、大枠で、マルクス主義を下敷きにしたものである。これは、わが国で所有を論ずる場合の定石のひとつだったが、今回はそのためかえって注目を集めた。マルクス主義の崩壊を語る事が容易となったこの時期に、それは果敢な試みだったからである。

\*

最初にこの問題に対する私の見解をのべ、つぎに両報告に対するコメントをのべたい。

資本主義経済のもとで、資本は、組織(企業)として存在

する。その実態は、人的配置/物的配置の複合であり、それ、労働市場/資本市場(土地市場)を通じて調達される。資本主義経済の特徴は、資本が信用という形態をとり、かつてないほどすみやかに市場全域にわたる人的配置/物的配置の再編を行なうことだ。この点で、資本主義経済の市場は、それ以前の市場経済と異なっている。

この資本主義経済のアンチテーゼとして、社会主義経済が対置された。この二つの体制が世界の覇を争った「冷戦」が、この半世紀だった。

二つの体制は、生産要素(資本・土地)の私的所有/社会的所有をめぐって対立する。前者は、各経済主体の自由競争を積極的に位置づける「分権的決定」の経済システムである。個々の経済主体(企業)は、いわばこのシステムに参加するルールとして、利潤追求を目的にしている。それに対し後者は、計画経済の秩序と公正さ、人間学的な優位(疎外の克服)を掲げた。この二つの体制の是非はこれまで、どちらが効率的かとか、正当かとかいった言い方で語られてきた。ではこれを、所有論のチームでどこまで問題とすることができるか。両報告では、そこがわかりにくい。

\*

まず、岩倉報告に対して。

最初の疑問は、氏がマルクスの所有論が正しい(もしくは有効である)という前提に立っているのかどうか?

東欧・ソ連の崩壊を、社会主義経済体制の非現実性が証明

### 現代所有論

#### 発題

1991年度日本法哲学学会学術大会(於日本大学)統一テーマ

について……………井上 達夫… 1

#### 論説

近代の哲学的所有理論……………三島 淑臣… 6

——ロックとカントを中心に——

所有制度と普遍的合意の可能性……………岩倉 正博… 25

現代日本の所有問題とその歴史的な文脈……………水林 彪… 40

所有権は何のためか……………嶋津 格… 58

自己所有権とエンタイトルメント……………川本 隆史… 77

——私的所有権の光と影——

#### コメント/シンポジウム

コメント……………塩野谷祐一… 95

法哲学への期待……………丸山 英気… 98

岩倉報告および水林報告とくに岩倉報告に関する

コメント……………森末 伸行…102

岩倉・水林報告へのコメント……………橋爪大三郎…105

シンポジウム概要……………井上 達夫…108

#### 分科会

アルトゥール・カウフマン法哲学の成立と構造……………永尾 孝雄…115

ルターと自然法の問題……………伊藤平八郎…127

——後期スコラ思想との関連で——



された、と人びとは受けとめた。それなら、それはスターリンの失敗なのか。レーニンに責任があるのか。それとも、そもそもマルクスが間違っていたのか。この疑問に解答を与えないで、単にマルクスを解釈しても、時代の課題には応えられない。第二の疑問は、「労働が価値を生む、ゆえに、労働者がすべてを所有するのが正しい」というマルクス主義のテーゼは正しいのか。——以上が、岩倉報告を聞いて、どうしても知りたいと思ったことだった。

今回読み直してみても、やはりわかりにくいのは、《広義の規範的な議論の土俵でこそ、所有問題は論じられなければならない》という論文の結論にいたる道筋である。氏の整理によると、初期のマルクスは《疎外されざる本来の人間の本質……を準拠点として私的所有批判を行なつてい》たのに、後期では《社会的生産の共同的編成……を規制する……規範的な制度をめぐる問題が……少なくとも正面から取り上げられない》。簡単に言うとマルクスは、生産手段を誰にどう所有させたいのかよく考えておらず、仕事をやり残したと言っているのである。この点を議論できないのはハーバマスも同じだ、と岩倉氏は言いたいようだが、それなら議論のすまないうちに「私有財産の否定」を打ち出したマルクスの責任はどうなるのか。

つぎに、水林報告に対して。

水林報告の後半、特に株式の相互持合いなどにもとづく

形態からの逸脱とみななければならないのかということである。水林報告にいう「会社主義」はそもそも、日本資本主義のあり方を、普遍的な要素（論理的前提）である資本主義と特殊な要素（歴史的前提）との複合として、分析的に捉えようという提案である。これは実り多いプランだと思う。けれどもこれだけでは、マルクスのオースドックスな定式による資本主義の概念もまた、ヨーロッパ独自の文化的な背景を含んでいる事情を小さく見積りすぎることになる。家↓会社主義という日本的な系譜がそれほど注目すべきなら、ヨーロッパの文化的基盤↓（ヨーロッパ的）資本主義の系譜にも、同様な注意が払われてもいいだろう。日本の会社主義を、あるべき資本主義からの偏差において（だけ）計測することは、バランスを欠くのではないか。

——というような疑問を覚えたものの、結びにある《次の課題は、近世から現代までの日本の歴史を、日本型の経営体および日本型の経営ライトゥルギー国家の変遷史として具体的に跡づけることである》との件に、意を強くした。こうした仕事は、「成功」した資本主義国・日本の自己理解にとつて必須であるだけではなく、アジアNIEsや中国の今後を考えるうえでも有益な示唆をもたらすはずだ。

\*

さて、両氏の報告は、どちらも資本主義の現代的な様相に注目するものだった。

所有という基本的な事象と、資本主義という複合的な事象

「会社主義」の議論は、とてもわかりやすい。日米構造協議はリヴィジョニスト（日本見直し論者）の主張を下敷きに進められているわけだが、そういう折りから、日本の学者による日本社会の再点検がさまざまな専門分野で進んでいることは喜ばしい。

前半も明快で、興味ぶかく聞いたが、二つの疑問を抱いた。ひとつは、近代的所有やそれに続く資本主義的所有を、本源的所有からの否定・分解・逸脱によるものとする必要があるだろうかという疑問である。歴史上、いつくもの所有制度が区別でき、それらがゆるやかな発展・変形を通じて変遷していることは理解しやすい。そして近代的所有が、先行する共同体的所有を否定する関係にあることもわかる。しかし、だからと言って、共同体的所有を「本源的」（本来あるべき、といったニュアンスがある）と考える必要があるだろうか。

近代的所有・資本主義的所有を、歴史的で可変なものとするためには、つぎのように議論を組み立てるやり方もある。まず、所有という現象を、一般的（没歴史的）に考察する。これはいわば、所有というゲームのルール（ないし文法）の記述にあたる。つぎに、それにもとづく定石（ないしイデオロム）のようなものとして、さまざまな所有制度の具体像を考察していく。こうすれば、特定の歴史段階を「本源的」と考える必要もない。うえに、制度の比較分析も同じように実行可能であろう。

もうひとつの疑問は、いまのべた点と関係するが、日本社会における資本のあり方を、どうしてもヨーロッパの古典的な

との間には、小さな溝がある。マルクスは、所有↓商品↓貨幣↓資本↓資本家的生産様式（賃労働）という展開を明晰に描いた。これが今日でも、資本主義を概念的に把握する場合の常套である。問題は所有の概念が、マルクスの想定したように、資本主義のすべての様相を描き出すのに十分なのかどうかである。

所有は、人（主体）—物（客体）の間のザツハリツヒな関係である。それは、ある人間を焦点とした局所的な社会関係だ。たしかに資本主義は、所有の面で特徴的な形態（労働力商品や株式の所有）をそなえている。しかし資本主義そのものは、そうした所有関係が集合し複合するところから創発する独特な現象なのである。

水林報告にいう「会社主義」は、主体—客体という所有の原則的な関係を離れた、共同社会の伝統のこと。資本主義企業がその所有制度の枠内で、もともとの原則の一部を解除し、より「機能的」に行動する可能性を示したものだ。裏返せばこれは、資本主義を「所有」において捉えることの限界を示すとも言える。

かつてのマルクス主義のように、資本主義を所有制度のレヴェルで批判するだけで、資本主義に代わる経済の運営メカニズムの代案を示さないとすれば、計画型の「社会主義」を帰結するほかない。この崩壊を、われわれは目撃したはずである。両報告から私が見えた教訓は、資本主義は所有によって十分論じられない、ということだった。